



キヨヒロ マイコ

# 清廣麻衣子

本学に在籍するユニークな学生を紹介するこのコーナー。今回紹介するのは文学部3年生の清廣麻衣子さんです。文学部で近世日本文学を学ぶかたわら、落語研究会の一員として高座に上がって活躍。そんなアクティブな彼女に新サークル棟でインタビューしました。

「江戸落語は  
粋でかっこいいんです」

粋な笑いに魅せられて

高校3年生のころ、大学受験を控えて勉強に没頭していました。あるとき、気分転換にiPodで落語を聴いたんです。そうしたら、今の「お笑い」とは違う「粋な笑い」がそこにはあって、それがとても面白く感じられて、落語が好きになりました。

粋でイナセな江戸落語

落語研究会には、上級生が新入生の「師匠」となって噺の稽古をつけてやる伝統があります。新入生は入部時に

江戸落語の師匠につくか、上方落語の師匠につくかを選べるのですが、私は江戸落語を選びました。

江戸落語は上方落語のような「華やかさ」



日常生活で、たとえばテレビを見ていてもほんとうに声を出して笑うということはないめったにないと思うのですが、

や「爆発的な笑い」には欠ける点がありますが、そのかわり、「粋」で「イナセ」です。言い換えれば渋くてかっこいい。そして、人のあたたかみを感じられる点が私の好みになっていました。

寄席では私の噺でお客さんがみな楽しそうに声を出して笑ってくれる。それがなによりうれしいですね。



落語研究会での活動

落語研究会では、6月と12月に開催される「ぼっこ寄席」などに年に数回寄席を開いたり、福祉施設への出張落語などを行っています。もちろん高座に上がって落語をするのですが、最初はとても緊張しました。でも、舞台をこなしていくうちに度胸がついてきて、今ではお客さんの反応を見て噺の運びを変えるまでになっています。

落語研究会では、6月と12月に開催される「ぼっこ寄席」などに年に数回寄席を開いたり、福祉施設への出張落語などを行っています。もちろん高座に上がって落語をするのですが、最初はとても緊張しました。でも、舞台をこなしていくうちに度胸がついてきて、今ではお客さんの反応を見て噺の運びを変えるまでになっています。

落語研究会では、6月と12月に開催される「ぼっこ寄席」などに年に数回寄席を開いたり、福祉施設への出張落語などを行っています。もちろん高座に上がって落語をするのですが、最初はとても緊張しました。でも、舞台をこなしていくうちに度胸がついてきて、今ではお客さんの反応を見て噺の運びを変えるまでになっています。

日常生活で、た

江戸文学への興味

今、文学部人文学科の言語文学専修コースに在籍しています。そこで日本の近世文学、とりわけ江戸の文学について学びたいと考えています。落語の素養が研究に活かせるというのも、もちろんありますが、江戸時代

岡大は総合大学で、知りたいことがあったらすべて学べます。私自身、教職を取るために教育学部の授業を受けたり、一般教養で理系の講義を受けたりしました。好奇心が旺盛で、なんでも知りたがるので、そんな風に、学びたいものをすべて提供してくれるところがいいと思います。

「何でも学べる、それが岡大の魅力です」